

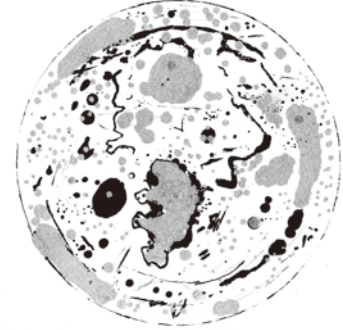
ヴィラ・マーヤ便り

知と文明のフォーラム ニュースレター

「マーヤ」はサンスクリット語で「幻」の意。
ヴィラ・マーヤは伊豆高原にある知と文明のフォーラムのセミナーハウス。

2011年9月25日

No.4



座談会 三・一一をめぐって

伊豆高原ヴィラ・マーヤにて（二〇一一年六月四日）

出席者（五十音順）

片岡みい子（翻訳・ライター）、

片桐祐（外国語講師）、

北沢方邦（構造人類学）、田中亮一（指圧）、

森淳二（編集）

地震の国、台風

片桐 地震国に宿命的に生まれてしまった人間が、こういう地震とどう向き合うか。災害と。これからも同じような地震に遭うことが当然考えられる。それと、私の場合、故郷の相崎では地震と原発がセットになっていて、ある種の切迫感があります。

田中 山脈などの成り立ちを考えると、過去に相当大きな地震が起きている。人類誕生前かもしれないが、この地震すらもしかして余震で、これから本震みたいな。あとから東日本が余震だったと言われてもおかしくない。

片桐 統計的にはどうなのでしょう。私はこれが本震で、あと余震の強いのが思いたいのですけど。原発もそうだが、誰のデータを信頼すればいいのか。現在の日本の地震予知精度ってどうなのでしょう。

北沢 観測機器は東海大地震などを予測して細かいメッシュでつくられているが、はたして予知できるかどうか、また地震学は正確ではない。むしろ動物のほうがいわゆる超能力を持ち、予知して備える。日本の地震のシンボルはナマズですが、のちに中国の影響で龍になるけれど、地の雷神オロチつまり大蛇が天地を昇降し、天に昇ってイカツチとなり、地下にもぐって火山となって爆発したり、地震を起こす。神話の俗化でシンボルが部分的になり、ナマズはオロチの髭の部分で、鱗を表すなどと。ナマズは地下に潜む龍のヴァリアント

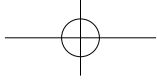
です。おそらく沼の深みにいるナマズは、地震を予知し、泥に押し潰されたくないで浮き上がってくるようなことがあるでしょう。鹿島神宮の祭神タケミカツチは天の雷神で、太陽アマテラスの守護神ですが、かつて地の雷神と出雲のイナサの浜で相撲をとって勝った。この神話から鹿島の神は地震や噴火をつかさどる地の雷神を封じる力を持っているとされ、江戸時代の信仰を集めた。地震除けのお守りの「なます絵」には、必ずタケミカツチが大ナマズを踏みつける、あるいは鹿島石でおさえられている図柄となっている。自然科学的な観察と、神話的思考とをみごとに一致させた日本人の地震観です。森 僕はあまり経験がない、大地震については、伊勢湾台風など水害は何度もありますが。

北沢 台風も地の雷神が起すのです。

片桐 仙台の友達の話聞くと、目の前を生きることが精一杯で、福島のことには頭にないと。幸い風があつちに行つていなかった。もし風が北に行つていたらそれこそ……。

北沢 三月にしてはめずらしい冬型気圧配置で、北西の強風が吹いていた。原発事故のもっとも恐ろしい初期段階の放射能の大半は太平洋へ吹き散らされた。あれはそれこそ「神風」ですよ。三月二〇日すぎに一時的に東南の風になり、飯館村あたりまで逆流した。もし夏だったら、仙台はじめ宮城県が一番悲惨なことになった。あれ以来いつも気象情報の風向きに注意している。神風とは神が引き起こす風の意味で、台風は稲作を全滅させたり大変なだけけど、台風も地震も「天災」ですね。このことばほど日本人の自然観を表しているものはない。欧米語のディザスターやカリミティにはそうした自然に対する畏敬の念がまったくふくまれていない。天災は起こったら受容するしかない。しかし、天災と人災である原発事故はまったく違う問題です。今回の原発事故は、経済優先の近代文明の矛盾と、伝統を無視し、近代化を最優先した日本の矛盾とが二重に映し出されたものです。

片岡 地震は昔からあって、日本人の感性に影響を与えていると思う。小心者の私は、毎晩寝る前に、「おかげさまで、今日も大きな地震が来ませんでした」と感謝していました。日本の家は紙と木でできていて、壊れやすく燃えやすい。日本人は利那に生きて、悪いことはなるべく考えないようにしてきたように思う。



北沢 日本にも石材は豊富なのになぜ木造か。五重塔などは巨大な芯の柱を遊離させてあって、その周囲で木組み全体を巧みに揺れさせ、強い地震でも絶対に壊れない。木造建築は地震国に対応した文化です。火事は弱いけれど。

片岡 雪国の家の柱は太くて強いですね。

北沢 沖縄では強い台風でも家は倒れない。かつて建築をはじめ、天災に対応する文化を宮々と築いてきた。明治近代化以後は、欧米に追いつけ追い越せてこれらの文化や思考体系を失い、とりわけ都市は脆弱になっている。

原発はなぜ必要とされたか

片岡 こんな地震国に原発を建てるのが、そもそも大きな疑問です。

森 日本に来ている南アフリカの政府関係者がNHKのインタヴューで言っていた。こういう事があつたにもかかわらず原発は必要だ。その理由は安いから。当然危険性はあるが、われわれ貧しい国が環境を汚さないで電氣を得るには、いまのところ原発以外に考えられない。現時点で自然エネルギーは高い。それが利用できるのは先進国だけだ。と。現実的に国の政治を担っている人が言う言葉だから、それなりの説得力がある。危険性はあつても原発はある意味で経済合理性を持つているという主張は、原発推進派の論理につながるのだが。北沢 コストが安いというのはランニング・コストつまり運転コストだけです。建設費と、政府つまり税金でまかなう原発立地交付金、電力会社による地域の箱物づくりや道路整備などの巨額の費用、一〇年以上かかる廃炉のコスト、高濃度・低濃度廃棄物処理費用、核燃料サイクル建設の莫大な費用、今回のような大事故の天文学的補償費など、それらを組み込めばとてもコストが安いなどとは言えない。安全性の問題でも、仮に事故を起こさなくても原発は環境に微量の放射線をばらまいているし、点検や操作の作業員や労働者はつねに低線量被曝にさらされる。マンハッタン計画の時、ナバホでウランニウム鉱脈が発見され、ナバホの人たちの優先雇用を条件にするなどして鉱山を開発した。そこで働いた鉱山労働者たちは、低線量長期被曝でガンに冒され、多くは死亡している。死亡率八〇％とさえ言われている。ナバホに限らず鉱夫にな

新しい未来へ

二〇一一年三月一日以降、東京電力福島第一原子力発電所の事故は、未だ先の全く見えない状態が続いている。

原発は、原子力の平和利用の名の下に、国民に受け入れられ、地震では破壊されないとの安全神話を基盤に、一九六三年東海村を最初に、日本全国に脈々と造られ、日本の電力供給の一端を担ってきた。しかし、現状は、大量の放射性物質が日

本あるいは世界に飛散し、もはや收拾のつかない状態になっている。原子力核分裂の威力とひとたび抑えきれなくなった場合の人類への脅威の計り知れなさは、広島・長崎で確認された。であるならば、我々は余程の覚悟と責任を持って原子力に向き合わなければならないはずであるが、そもそも、人類は原子力を制御することが可能なのか。確かに、我々が享受してきた便利で豊かな生活、

経済の発展に電力は不可欠であった。しかし、我々が利益を享受しながら、一部の人達や後世の子ども達に不利益を押しつけ、責任を負わせることだけはあつてはならないことである。幸福とは何か。豊かな暮らしとは何か。人生観、生活観が根本から問われて。真剣に考え、取り組んでいかなければならないことである。(つらもと)

るのは貧しい社会的弱者ですから報道もされない状況です。コストが安い、あるいは原発はクリーンだなどともない嘘であることわかります。

森 ところでウランの埋蔵量は豊富なのでしょうが。北沢 新興国が何百と建設したら、あと何十年かで涸渇するとも言われていますね。

森 日本の原発を強力に推進した正力松太郎は、ウランの埋蔵量をほとんど無視したと言っていますね。

北沢 鉱物でいえばウランニウムは希少資源で、しかも燃料とする235は原石に数%しか含まれていない。これから中国はじめ多数の原発ができたら燃料価格も上昇し、ランニング・コストにも影響する。だから、高速増殖炉などと言っている。森 高速増殖炉と、使用済み核燃料の再処理とは違うんですね。

北沢 高濃縮廃棄物の再処理とは別です。使用済み核燃料に残るウランニウム238に強力な中性子を当て、燃やすとともに、その副産物であるプルトニウムを増殖するというのが高速増殖炉です。冷却材には空気に触れると大爆発する危険きわまる液体ナトリウムを使用するので、軽水炉以上に危険です。事故つづきで各国は撤退しているのに、「もんじゅ」は再開しようとして修理している。一九九五年の事故も、あの程度ですんだのはほとんど奇跡的です。

田中 最後まで安全に処理する技術と方法が、まだないということですね。処理できないのに、つくっている。

片岡 つまり、最後の処理過程を決めないうちに始めた。なせまた。

北沢 ブログにも書いたが、これは原子力潜水艦用の原子炉をスケール・アップして民間用に転用したジェネラル・エレクトリック社の同盟国向け海外輸出を後押しするアメリカの陰謀です。アメリカ政府の圧力と、原発を持つてはプルトニウム型核兵器をすぐに生産できるという日本政府の下心が一致したわけです。各電力会社ははじめ反対だった。国策だ国策だと歴代自民党政権が、原発立地交付金をはじめ莫大な費用をかけて推進した。燃料も全部アメリカ依存でした。それで核燃料サイクルを六ヶ所村につくり、稼働させれば、自立した核大国になれるというわけです。

森 日本の原発の第一号機は、イギリスの技術だとか。北沢 研究用のものですね、京大や東海村の研究施設。イギリスとかソ連で大々的に開発されたのは黒鉛炉。水や制御棒を使わずに黒鉛で制御する。黒鉛は基本的に炭素だから燃えやすく危険。チェルノブイリのように燃えて大爆発を起こす。日本の原発はすべて軽水炉で、加圧水型と沸騰水型とがある。

片岡 その先鞭をきつた、窓口になったのは正力松太郎？北沢 民間ではね。もつとも、彼は衆議員でもあつたから純然たる民間ではないのですが。あの頃、自民党政権の首相は誰でしたか、一九六四年のオリンピックを経て日本も世界の大国になったというわけにいわれる巨大テクノロジーを推進

する。宇宙開発まで手は届かない(九〇年代には手が届いた)が、アメリカのあとを追いかけた。しかし世界的には原発以上に老朽化した核兵器やその廃棄物が問題です。原発は一〇数パーセントだが、核弾頭は七〇〜八〇パーセントに濃縮している。この核兵器の廃棄物は貯蔵されているが処理はできず、環境汚染を引き起こしている。アメリカのある女性作家が『マリリーヨによろこせ』という皮肉な本を書いているが、テクサス州マリリーヨには老朽化した核兵器貯蔵所があり、深刻な環境汚染を引き起こしています。

なぜ脱原発が困難なのか？

森 不思議なのは、これほど問題があるにもかかわらず、世界の趨勢が原発を捨てないということです。

田中 大量生産・消費のなかで、電力を使い慣れたいまの生活スタイルを変えるのが怖い。原発がないと駄目だと洗脳されているところがある。

北沢 とくに新興国は。

片桐 原発を持つことがステイタス・シンボルで発言力強化につながると思われているのかもしれない。

森 地域が自立的な経済を打ち立てることができれば、こんな危険なものも排除するはず。それができず、原発がもたらす交付金や雇用に依存してきた。

片桐 だから政治も原発からなかなか舵を切ろうとしない。日本経済新聞社のアンケートだと六割くらいはまた賛成。

北沢 福島が駄目になり、浜岡は停止しているが、現状維持派はけっこう多い。だが全体では原発を増やすことにはノーです。菅氏の浜岡原発停止要請以後の脱原発発言は支持できます。いまのところ世論は日本のエネルギーに関しては健全な方向に向かっている。

片桐 なにしろ推進派の「日経新聞」だからあの数字なのでしょう。か。どういう形でアンケートをとったのか。とくにエネルギー問題についてメディアのはたした役割は大きい。これだけ足りない、これだけクリーンだと。

北沢 戦争犯罪と同じです。国民を戦争に駆り立てた責任のかなりの部分はメディアが負っている。かつてNHKは国営だったから政府宣伝はしようがないが、民間の新聞がはたし

た役割は大きい。戦後六〇年代からはほとんどの雑誌新聞が原発推進キャンペーンを張った。正力の「読売」だけではない、「朝日新聞」では論説主幹の岸田純之助が「原発推進は「朝日」の社是です。これに従って記事を書け」という社内通達を出している。私は七〇年代半ばから原発を主張してきたが、大手メディアではまったく取り上げてくれなかった。多少彼らの弁護をすれば、ローマ・クラブの報告がセンセーショナルを起したが、六〇年代に化石燃料の潤滑が大問題になった。その後多くの海底油田が発見され、緩和されたが(だが昨年メキシコ湾のBPの事故が起きた。千メートル以上の海底での事故はきわめて危険性が高い)。そうした枯渇説が原発推進の原動力となった点もある。

片桐 正力は、アメリカに勧められたさい、ランニング・コストが一キロワット当たり一六円と言われた。商人の感覚から、これで一気に原発に傾いた。

森 いまだにその神話が語られている。新エネルギーの開発にお金が行ってない。

片桐 「小規模発電じゃ駄目。高コストだし、安定供給できなきや世界の競争に負ける」と不安を煽られている。総発電量は、一九八〇年代半ばから倍近くに増やしています。

北沢 原発をはじめ莫大な設備投資をし、その回収のためにオール電化などと大宣伝してきた。事故が起こると電力不足と大騒ぎする。企業と政府の陰謀と聞いていい、これは。

森 たた、社会的に意識は少しずつ変わってきている。メディアの方向も。少なくとも「朝日」は変わってきているようだ。

北沢 G8でも菅氏は、省エネルギーと自然エネルギーへの転換を言ったが、こういう政治状況だと実現できるかどうか。原発推進を含め、いまの格差社会・孤独社会をつくってきたのは自民党です。政権交代したけど、民主党もまったく応えられない。政治状況は絶望的。

森 今回の事故を受けて、今後のエネルギー政策を明確にしている政党はないのか。

北沢 原発反対は社民党だけが説得的な代替案はない。森 政党は考え方を示してほしい。どういう社会をつくっていくかの問題。

北沢 わが国の政党や議員の質も問題だが、議会制度が駄目です。立法府とは名のみでほとんどの法案は政府が出す。ア

メリカでは重要な立法は議員とくに上院が中心になってやる。上院は各州二名選出で、州の人口に応じてスタッフ割り当てられる。たとえばニューヨーク州だと議員一名に三四名のスタッフがつく。それとは別に、議会の政策スタッフは専門分野に分かれて多くいる。議員立法する場合、これらスタッフが何百人も集まって法律を作成し、それを議会にかける。議員はどこでも超多忙ですが、日本の場合、立法府のスタッフも機能もほとんどない。それに関する議論もない。七一年にワシントンで、翌年の大統領選の民主党候補になったジョージ・マクガヴァンの首席スタッフにインタビューしたり、また日本に帰って政策集団を主宰していた時、来日した議会スタッフを呼んで話を聞いたが、近代民主主義制度そのものの彼我の落差にがっかりしたことがある。

国際社会のなかで

片桐 今回の事故については諸外国の関心も高いですね。

北沢 私個人としては、近代文明の転換とその方向を、フクシマ以後打ち出さなくてはと思っています。またフクシマの教訓を国際社会がどう受け止めているか、日本がどう働きかけるべきか議論しなくてはいい。

森 音楽家の来日中止が続いている。買っていたチケットが二枚無駄になったしメトロポリタン・オペラでは、テノールのカウフマンとソプラノのネトレプロコという看板スターがキャンセルした。外国から日本を見ると、日本列島が全部汚染されていると思えるのかな。

北沢 ヨーロッパに関しては、今回と比較にならないチェルノブイリ事故の、ある意味で悪い影響があります。高濃度の汚染がスウェーデンというかけ離れたところで観測され、風向き変わって、東欧やイタリアからトルコというところでもない範囲で汚染が起った。飛散した放射線の量も桁違い。その記憶が頭にあるから、小さな日本列島は放射能まみれだというイメージでしょうね。

片桐 フランス人の講師なんか急に学校に来なくなつた。赤ん坊がいるからとかしかるべき理由がある人もいるけれども、フランス人らしい行動基準で危険地帯からは逃げるが勝ちというものが多い。

片岡 アジアの留学生も帰った人が多いですね。

北沢 日本語が分からない人には怖かったでしょうね。だがフクシマ原発事故は国際的に反響を呼んでいる。ドイツ、フランス、各国で反原発デモが起こっている。諸外国のなかではドイツやイタリアが脱原発に方向転換し始めた。ただ両国の場合、足りない電力は隣国から買えるのですが……。

片桐 東京でも地方でも、デモがあっても報道されてない。フランスにいる友達から、あんなひどい目に会っているのになんでデモやらないんだと、怒りの電話をもらった。メディア・レベルには出ない。かりに出たとしても、参加者の少ないデモが新聞のすみに申し訳程度にのるだけ。記事になって出ないと信じてもらえない。電力会社の上層部の多くはマスメディアの会社の役員に名を連ねているから、こうなる。

北沢 メディアの話では、一応安全神話崩壊と原発慎重運転では一致しているが、過去を含めた深い反省はない。「毎日」は被災地のセンチメンタルな記事が多く、そうした報道も国民感情に配慮して大事だが、反原発デモは報道していない。「朝日」はどう変わったんですか。

森 太陽光や風力の開発を進めること、発送電の分離を検討することなどを主張しており、脱原発に舵を切ったように思う。

北沢 国際社会に向かっては、日本が新しい方向に進む、文明転換のイニシアティブをとる国になるんだという姿勢を示してほしい。ここで変われなかったら、もう変わる機会はない。

田中 ある意味世界は注目している。

片岡 地震・津波の天災に、原発事故という人災が重なって、東日本の水と土と大気が汚染された。原発は、これからも放射能を撒き散らし、垂れ流し続ける。産業と生活基盤を奪われたまま、被曝しながら復興を図らねばならないという未曾有の事態。現代文明の矛盾が爆発し、文字通り汚れちまった「東日本」は、世界の最前線。そこでどんなモデルを身をもって示すことができるのか、力が試される。

片桐 ドイツの前に、当事者の日本の首相がもっと力強い言葉を、どうして言えなかったか。

北沢 民主党全体が駄目だからですよ。民主党のなかにも原発推進派はたくさんいる。菅氏が代表になっても脱原発にはできないだろうと思っていたが、この大事故です。先程言っ

たようにその後の脱原発発言はいい。

森 理念や哲学を持っている政治家が少ない。

北沢 政府が駄目だから、せめてメディアやメディアに登場する人たちが発言してほしい。

田中 日本は世界唯一の被曝国ですし。

片桐 被災地の人々のなかに、小さなコミュニティが生まれつつある。昔から持っていたのが復活して、希望が持てる社会的な動きのように思える。地域の互助団体というか、分業制度をつくって、いままではなかった動きです。

北沢 今回の被害地が東北だったということが大きい。琉球もそうですが、経済成長主義者から見れば遅れた地域で、逆に、古き良き日本が残っている。明治近代化による中央集権で地域がねじまげられ、とくに第二次大戦後、高度成長で人間やコミュニティの絆は寸断され、それにもついていた伝統的モラルが消えていった。他方西欧流の個人の自己責任といった近代的モラル（それもねじまげられて失業も「自己責任」などということになった）も中途半端なもの。そこから大都會を中心に経済的格差の放置に裏づけられた「無縁社会」ができてしまった。しかし東北、とくに三陸あたりはまだその絆が残っている。映像を通じてですが、避難所や被災地でのひとびとの光景を見てすっかり感動し、日本人であることに誇りを持ちました。世界的にも感動を与えたようです。無縁社会や原発大事故は、近代が陥った袋小路の象徴であり、結末にほかならない。文明を転換しないかぎり、もっと悪いことが起きるだろう。人類の生残りさえもわからない。

フクシマ後の世界——知と文明の問題として考える

森 具体的に、どこを切り口というか、入り口としたらいいのか。

北沢 具体的にはエネルギー問題です。太陽光・風力はともかく、それ以外の自然エネルギーでは日本は資源大国です。小さい島国であるにもかかわらず複雑な海岸線の長さは世界でも何番目かで、海流も複雑。波浪発電・海流発電に絶好です。新技術も開発され、海中タービンでかなりの発電ができる。地熱発電は温泉地帯などで大規模にやると、ある意味で自然破壊になるが、高温岩体発電は小規模ですむ。里山では小型

水力発電が有力です。それから世界有数の森林面積を持つわが国では、間伐材などにより、また農村では稲藁など農業廃棄物の利用によるバイオマス発電、堆肥プラントの発熱やメタンガスによる発電、ある種の雑草栽培によるエタノール生産、こうして地域エネルギーの自給自足体制をつくり上げれば、あとは大都市の電力を確保すればいい。それによって日本の社会や経済が変わり、文明も転換していかなるをえない。

エネルギー問題が突破口ですね。

森 ところが現実には、生産の面でも雇用の面でも、大企業の発展が重視されている。そういう形ですが、現代社会はやっていけないと喧伝されている。

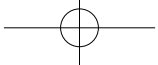
北沢 政府・財界などエスタブリッシュメントは現状の延長の方向、いわゆる外挿法的思考でしかものごとを考えられない。彼らに思考体系の転換を迫らなくてはいい。

片岡 前近代まではコミュニティがあつて、良くも悪くも地縁・血縁が強かった。時代が下るにつれ、人が動きやすくなる。皆が小さな幸せを求め、判断して自らを再編成していった結果、核家族化が進み、その家族も壊れやすくなる。仕事の都合や学校の事情で別居し、効率や成果で生活様式も見直した。少しの自由、少しの楽、少しの快を皆が求めて、家族はバラバラになる。地縁・血縁の束縛が減ったぶん、しがみついた場所も相手も組織もなくなった。「バラバラ、粉々になつていく感じ」、それがポストモダンなんだろう。原発誘致で潤った人もいるし、出稼ぎに出なくてよくなったと喜ぶ人もいて、安い電気があるといねと大半が思った。皆が良かれと思つた結果だから、原発事故も貧困も格差も、誰も責められない。バラバラになった個が、いま、あらためて結集する規準が必要だと思つた。

北沢 地域の新しい自給自足体制をつくるにしても、それに共鳴する人たちが集まって始まるしかないですね。すべての領域で物の考え方を変えなければいけないんだという人たちが集まって行動を起こすほかはない。

森 たいへん困難なのは、いまの世界を席卷している資本主義が、人間の欲望をもとにして成り立っていることだ。ある点で、人間の本性に合致したシステムだと思つた。

片桐 また、そういう欲望を徒らに喚起するシステムになつている。



北沢 皮肉なことに資本主義を生み出したプロテスタントの「神のための禁欲主義」が、正反対の経済至上主義・物質主義・欲望の肥大という結果を生み出し、それを拡大していくのが近代社会となった。デカルト的・二元論がその分裂と二律背反をうながした。それとキリスト教的な人間中心主義が自然や植民地の収奪を押し進め、戦後植民地は独立したが経済的搾取という新植民地主義体制は推進され、近代文明はわき目も振らず袋小路へと進んだのです。

森 いかにしてグローバルな資本主義社会を生き延びていくか、このことしか考えていない。

片桐 ただ今回の原発事故で、あらわになった部分があつて、どこかで変えねばという意識が出てきましたね。

北沢むしろ知識人より、被災地をはじめ一般庶民のほうが強く感じている。それを汲み取って理論化し、政策に反映させていかなくてはいけないが、それをやる人がいない。

特別寄稿 見えない世界への重い扉——文明のパラダイムシフト 橋本宙八

原発事故に復興はない

我が家は、福島第一原発から二四キロ地点、山を一つ越えた西側にある。

地震直後に家族で脱出。余震に追われ、爆発による被曝を避けながら、いわきから四国まで千キロを避難。その間考え続けたことは、この未曾有の事故が一体何を日本に、あるいは世界にもたらすか、だった。

今回の災害には二つの顔がある。一つは、地震、津波の自然災害。惨状の中でも多くの希望を見せてくれている岩手、宮城の復興の姿。もう一つは、人災だった原発事故。福島には、汚染された大地と海、失われた自然への悲しみと、被曝した生命の終りの見えない恐怖が残された。原発事故に復興の喜びはない。

日本国崩壊の事件

原発事故はなぜ起きたのか？ 言うまでも無くそれは、

片桐 個人がバラバラになっていくのが、いままでの世界史的な流れ。同じように学問の専門領域もバラバラになって、それをつなぎとめるようなシステムがない。それが今回の事故に集約的に現われている気がする。原発の部分を語る人は山ほどいるが、政治、経済、歴史などさまざまな分野を包摂して見渡せる人がきわめて少なくなっている。

北沢 科学でも個別の専門領域を統合して、もつと学際的あるいは超学的（トランスディシプリナリー）、さらに全体論（ホーリズム）でやらなくてはと言われてはいるけど、旧来の近代的なものの考え方に立つかきりはうまい、きません。むしろ物理学や生物学などの最先端では近代科学のパラダイムシフト（体系転換）が起こっているが、それらをも統合する哲学や世界観がいま要求されているのです。

森 転換させるには、エネルギー問題、地域の問題、農業の問題などがありますが、具体的には省エネあたりからでしょ

戦後日本がわき目も振らずに追いかけて来た、豊かな国日本の想定外のゴールだった。

国を幸福と平和に導くはずの政治家、官僚、企業人、そして学者を育てた戦後教育。その哀れな成果が、原発事故の主役たちの姿だった。またそれは、自らの意思を放棄し、彼らに盲従した自立心無き国民をも育ててしまった。

溯れば、その原点は、開国以来、日本が追いかけて来たものでもあった。西欧文化の虜となり、優れた日本のココロの文化を捨ててしまった日本人。この災害は、明治から第二次大戦後と、近代日本の誤った進路を見事に露呈した「日本国崩壊の事件」でもあった。

起こるべくして起きた事故

第二次世界大戦は、ある意味でアジアの列強国日本と、欧米の連合軍アメリカが、太平洋を隔てて睨み合い、激突した戦争だった。東洋の精神文明を代表する日本と、西洋

うか。新しい技術にしても、方向性が示されないと。たとえば再生可能エネルギーの開発を積極的に支援しているドイツやスウェーデンのように。

北沢 コスト問題ですが、新しい技術の開発には大きな先行投資が必要です。だが一旦軌道に乗ればコスト問題は解決します。何十年先を読まないと新しいことはできない。

田中 生き方、考え方を変えるのはむずかしいけど、原発事故によって、生き残れないかもしれないと考えている。生命の危険への直感というか、今回は。

北沢 いまひとつが目覚めているのはいい意味で本能、人間の生物としてのほんとうの遺伝子ですね。

片桐 その意味での危機感を抱いている人々は、若身を含めてけて少なくない。そこに突破口を見つけたところです。

の物質文明の申し子アメリカが、異なる文明を代表してぶつかり合った戦争でもあった。

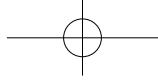
戦後、完敗した日本は、力とモノを持つ豊かな社会に憧れ、欧米化への道を突っ走る。元来、モノ作りを得意とした日本は、たちまち世界に冠たる消費国家を実現。その象徴都市、東京のエネルギーの釜本が福島の原発だった。

この利権に群がったのが原発村の人々。未だ確立されていない原発の制御には、何よりも明晰な科学の知識と、繊細なココロのバランスが不可欠だった。しかし、この地球上最も危い火を、ココロも大儀も持たない人たちに預けてしまった。この事故は、起こるべくして起きた事故だった。

文明のパラダイムシフト

ヒロシマ、フクシマは、なぜ日本だったのか？

それは、東西の文明に足をかけ、モノとココロを巧みに操り、そのバランスの大切さを世界に広めることが出来る



国でなければならなかった。その大いなる試練と栄光とを担える国、それが、日本だった。

ヒロシマの原爆は、東西の文明を融合させるための重い扉を開いた。フクシマの原発事故は、現代人が狂奔して止まない消費社会の限界を露にし、これからの文明が、いのちの大切さ、ココロを進化させるための社会へと向かうべきことを予感させている。

科学は、言うまでもなく、人間の幸福と平和に寄与するために生まれたものだ。

しかし、その科学が、文明のすべてを破壊する原爆を生み、すべての生命を消滅させる放射能を造り出した。これは、科学の自己矛盾であり、完璧な自己否定である。ヒロシマ、フクシマは、共に、科学の限界を示し、西洋文明終焉への道を押し開け、世界を東洋のココロの文明へと導く文明のパラダイムシフトである。

新しい文明へ、始まりのトキ

人間は、文明を創造し、自ら変容、進化する動物である。文明の善も悪も、ここどこがこの目的のために存在する。原発事故のキーワードである目に見えない放射能が私たちに教えていること、それは、心次第で見える世界は変わる。人の心の有様が世界は変わると言うことだ。

世界は今後、モノの探求から、イノチとココロを探求する時代へと向かうだろう。それは、自然エネルギーやバイオテクノロジーなどをステップとして、人々を、より自然と調和した生活や心の豊かさを求める社会へと導いて行くはずである。

西洋から東洋へ、科学から宗教へ、アジアの国々で眠っていた見えない世界を知るための文明が、人間の魂をより高度に進化させるために、いよいよ長い眠りから覚める。「マクロビアン」主宰、福島原発事故被災者

「知と文明のフォーラム」セミナー報告

昨年ニューズレター三号を発行してから今まで四回のセミナーが開催されました。それらセミナーの経過報告はそのつどブログに掲載されておりま。ここでは幾分縮約した形で報告文を再録しました。

二〇一〇年

●六月二三日 第一五回セミナー／レクチャー・コンサート
『ペーターヴェンの生涯』を聴く——《悲愴》から《ディアベリ変奏曲》へ
鼎談：北沢方邦、西村 朗、高橋アキ
演奏：高橋アキ
会場：津田ホール

青木やよび先生追悼コンサートに寄せて

六月二三日津田ホールにておこなわれた青木先生追悼コンサートは、非常に内容の濃い、充実したコンサートだったと思います。

西村先生のお話で、「ペーターヴェン」というと、中期、後期を経て、あまりにもすごい作品がありますが、初期の作品である《悲愴ソナタ》一つとっても、当時として、こんなものすごいものはありません」ということを言っておられたのをよく覚えております。あれだけ壮大な序奏を持っている

という点についてのご指摘で、不朽不滅の作品だ、というわけです。そして、「不朽の名作」という言葉がありますが、もちろん、メロデーが美しいものでも不朽と言えるのでしようが、しかし、ペーターヴェンというのは、形でものすごいものを示してしまった人です」という言葉が忘れられません。もちろん、ペーターヴェンであっても、不朽のメロデーと言ってもよい美しいメロデーがいくらでもあります。パイオリン協奏曲など、甘い美しいメロディーのメドレーと言ってもいいような作品ですし（もちろん、形式的にもしつかりしています）、ピアノ・ソナタでもとくに、作品二一〇の第一章の第一主題の美しさは、もう「美しい」という言葉自体が色あせてしまうような味わい深いものです。また、追悼コンサートで演奏された《ディアベリ変奏曲》の第三変奏（最後の変奏）などは、この世から遙かに遠く、究極の音楽ではありませんか！ さらに極めつけは、《ミサ・ソレムニス》の《サンクトゥス、ベネディクトゥス》のうちの《ベネディクトゥス》ではなからうかと思えます。

さて、追悼コンサートでは、また、こうも言われておられました。「ペーターヴェンの後期の作品についてのすべてが傑作ということ強調することはない」と。壊れかかっている音楽もあるではないかということです。確かに、私の好きな作品二二三の終楽章などは、もう限界ぎりぎりの音の使い方、壊れかけす前と言ってもいいと思います。しかし、また、その壊れかけ方が、病に苦しみ、ひしひしと死が迫っている巨匠から絞り出されるような声として聞かれるのです。

高橋アキさんの演奏ですが、《悲愴ソナタ》については、なかなか普通では聞くことができない、柔らかな、優しいペーターヴェンだったと感じた方が多かったのではないのでしょうか。こんなペーターヴェンがあってもいいんだらうな、と思いつながら聞いておりました第三楽章も非常に華麗で美しかったです。私は、《悲愴ソナタ》の演奏を聞きながら、これなら、恐らくは、《ディアベリ変奏曲》には合っているだらうなあ、ペーターヴェンの後期の作品にはいいだらうなあ、と期待したものです。

それにしても、これだけの大作を生で聞ける機会があったことは、本当に幸せであり、貴重な体験でした。青木先生もさぞや喜んでおられるに違いありません。(寺本)

●九月十一・一二日 第一六回セミナー 日本の安全保障と今後の世界 講師・坂本義和、北沢方邦

第一六回伊豆高原セミナーに参加して

さる九月十一・一二日の二日間にわたり、伊豆高原ヴィラ・マヤにて「知と文明のフォーラム」によるセミナーが催されました。「日本の安全保障と今後の世界」をテーマとした今セミナーは、講師に斯界の碩学、坂本義和先生をお迎えしました。

第一日は、日本の安全保障をめぐるいくつかの問題について、坂本先生から話していただきました。その具体的内容の大略を記しますと、第一に、一九六〇年の改定安保にはじまり普天間移設議論にいたるまでの「安保」関係史が展望され、第二に、「国際貢献」や「抑止」といった、「安保」をめぐるコトバのもつ盲点あるいは陥穽について指摘されました。第三には、今後の紛争例として軍拡競争、資源・環境紛争などが組上に上りましたが、その中で、食糧問題をかかえる中国の海外進出は欧米の植民地主義の再来にはかならないとの分析が目されました。そして最後の第四として、意見交換を求める形で、日本の国家と市民の課題をめぐる疑問文が提示されました。すなわち、国家とは？ 市民（社会）とは？ 東アジア共同体とは？ 憲法九条とは？ の四つです。

第二日午前には、前日の議論を踏まえ、北沢方邦先生から問題提起する形で、日米安全保障条約の歴史と現状、憲法第九条と自衛権・集団自衛権、日本の安全保障と東アジアの集団安全保障、今後の世界、これら諸点をめぐって、坂本先生との対談というひとまずの形をとりつつ議論がなされました。そして午後は、参加者同士の話し合いが持たれました。

さて、二日間にわたって提示された安全保障の諸問題は、どれもみな、わたしたちにとって馴染みがありながら、正面切って考えることを避けてきたようなものばかりです。そして、答えはこうだと簡単に言えそうにないものばかりです。

セミナーが終わってからもその思いは基本的に変わりません。とりわけ坂本先生から提起された疑問には、参加者の間からも多くの意見が出され、各人のよってたつ視点によってまるで違つたらえ方が可能であることを知らされました。

しかし、これこそがセミナーの効用というものではないでしょうか、こうして多様な意見を聞くうちに、この問題を考えるには少なくともこれだけの立場があり、それらの条件をクリアしないと正解には到達しないという、解法へのひとつの道筋が見えてきたことです。いうまでもありませんが、このような意見がだされる背景には、学生から旧政党内閣関係の方々まで、参加された方々の多様性があつたあればこそです。(片桐)

●一〇月三〇日 第七回セミナー／シンポジウム 「生殖革命」と人間の未来② パネリスト・江原由美子、長沖暁子、中嶋公学 司会・石田久仁子

シンポジウム（生殖革命）と人間の未来 報告

一〇月三〇日、知と文明のフォーラム、日本女子大学女性キヤリア研究所、日本女子大学人間社会学部文化学科の共催による標記シンポジウムが東京・目白の日本女子大に於いて開催された。司会者として参加させていただいた私にとって、それはとても刺激的な催しだった。

第一部 最初の報告は首都大学東京の江原由美子さんによる「フェミニズムと生殖革命——その問題点と展望」と題するもので、女性の自己決定権と生殖技術の進展をめぐる全体的な見取り図が提示された。近代の人権思想が生み出した自己決定権は、他者の身体を手段化するこの「生殖革命」を前に、再考を迫られる。そこでは自己であり他者でもある胎児の思想は欠落している。女性の身体の自己決定権は他者の身体をコントロールしないようにするわれわれの義務としての「自己決定権の尊重」に基づかなければならない。最後に江原さんは、代理懐胎などの生殖技術を利用して子どもをもつことは、生殖への社会的操作となるから、青木さんの自己決定権には含まれない、と述べて、どこからが社会的操作なのかと問い、青木さんが提唱された「生殖倫理」への議論へとつなげた。

続いて日仏女性研究会代表の中嶋公学さんが「女性の身体の自己決定権と人工生殖技術」フランスの代理懐胎をめぐる論争を中心に」について報告。現在、フランスでは生命倫理法改正が準備されているが、その最大の争点の一つ、代理懐胎の合法化をめぐる議論の紹介を通して、法と倫理の関係、女性の自己決定権と人工生殖技術の関係が考察され、「生殖倫理をどうつくるか」という青木さんの問題提起へと向かう報告であった。

最後の報告者は慶応大学の長沖暁子さん。報告は、発生学を専門とする生物学者とフェミニズム運動家としての二つの視点が交差する場からのもので、キーワードは変革だった。

これまでの生命観を変えるには当事者の語りから考えるしかない。不妊のわたしたちの語りから示すのは「不妊治療で子どもを得ても、不妊は解決しない」ことだ。また生殖医療は不妊の男女、配偶子ドナー、代理母、子ども、子孫へと当事者を拡大する。生まれてくる子どもへ視点を向けるとき、生殖医療におけるインフォームド・コンセントや自己決定の限界は明らかにする。子どもも含めたすべての当事者の語りの場をつくり経験を言語化すれば、皆で共有できる経験・知識となる。それをもとに他者との関係の中で決定が行われる社会をつくるのが重要で、この社会の変化が科学の枠組みを変えるのだ、と長沖さんは主張した。

第二部 最初に「知と文明のフォーラム」を主宰する北沢方邦さんが「青木がこの場にいたらお話ししたであろうこと」を「自身の見解も交えて次のように話された。「青木のフェミニズム」が自然との共生とうちなる自然としての身体の上の立つもので、「女性の身体性の根本にある生殖は青木の問題意識の中心」を占めていた。「生殖革命」は自然の状態ではありえない生命系への人工的操作であり、核エネルギー開発と同様に、これまでの諸概念の枠組みを越える技術開発である。この新しい技術は生物学的にも社会的にも人間のあり方を変えるだけでなく、生態系を揺るがす。人類の福祉に對立するその進展に歯止めをかけるための生殖倫理を緊急に確立する必要がある。

二人目のコメンテーター、和泉和恵日本女子大学専任講師からは、「理論、制度、当事者という三つの視点からの報告」を踏まえて、問題が提起された。最初に「自身の研究テーマ

である。里親や養子などの血縁でない親子関係と比較し、生殖補助医療で生まれた子どもと家族と共通する問題の構図があると指摘、その例として出自の隠蔽問題や当事者としての子どもへの語りがようやく注目され出したことなどが挙げられる。(石田)

二〇一二年

●七月九・一〇日 第一八回セミナー

芸術を容れる建築——ポンビドゥ・センターとそのコレクシオンからみる女性展

講師・岡部憲明、岡部あおみ、北沢万邦

岡部氏が設計チームに加わったポンビドゥ・センターは一九七七年一月に開館。美術館、図書館、産業創造センター、音響音楽研究所から成る複合文化施設で、パリ五月革命の理念を反映させ、市民に開かれた自由で広大なスペースを実現した。また一九八八年から手掛けた関西国際空港旅客ターミナルビルは、人工島の巨大空間。さらに一九九五年には小田急ロマンスカーをデザイン。高い天井、LED間接照明、薄い椅子、窓を大きくとり快適空間を演出。氏は、建造物のスケール、それに託されたコンセプト、包み込まれたヒトの身体感覚が大事だと語る。特殊なモデリング、構造計算、材料の調達、施主や行政との交渉など、多岐にわたる建築の仕事をお話くださった。

あおみ氏は、女性作家達の登場を歴史的に辿り、フェミニズムとアートの関わりを概観。ポンビドゥ・センターでの「一九一〇・七〇 前衛芸術の日本」展(一九八六〜八七年)で、五〇年代に「具体」で活躍した田中敦子の『電気服』などを紹介。その後、ジェンダーに注目したキュレーションや、実践してきた批評・研究についてのお話。同センターの所蔵作品による『女性展』(二〇〇九〜二〇一二年)や、ヴェネチア・ビエンナーレ展やバーゼルのアートフェアなど最新情報に触れ、近年増えた映像で表現する女性作家たちへの期待を語った。レクチャー後、伊豆高原ヴィラ・マリーヤ近くの宮井捷二(彫刻部氏設計)を訪問、見学した。(片岡)

活動の記録

二〇〇六年

三月一八・一九日 第一回セミナー「ヨーガとインド哲学Ⅰ」

講師・北沢万邦

五月二七・二八日 第二回セミナー「性差とジェンダーⅠ」

講師・青木やよひ、北沢万邦

七月一五・一六日 第三回セミナー「ヨーガとインド哲学Ⅱ」

講師・北沢万邦

十一月二五・二六日 第四回セミナー「野生の思考」

講師・杜こなて、青木やよひ、北沢万邦

二〇〇七年

二月二日 第五回セミナー「レクチャー・コンサート

「不滅の恋人にみるベートーヴェンの変貌」

講演・青木やよひ／楽曲解説・北沢万邦／ピアノ演奏・パーク・ヨンヒ／会場・ルーテル市ヶ谷センター

三月三日 第六回セミナー／公開シンポジウム

「北欧型教育と日本の教育」

パネリスト・伊藤美好、佐藤全、古山明男、リヒテルズ直子／会場・日本女子大学

十月一三・一四日 第七回セミナー「性差とジェンダーⅡ」

講師・青木やよひ、北沢万邦、杉山直子

二〇〇八年

四月一九日 第八回セミナー「レクチャー・コンサート(世界音楽入門Ⅰ)」

「世界音楽入門&西村朗のタペ」

講師・北沢万邦、西村朗／演奏・上野信一、蛭多令子、藤本隆文、松永加也子、上野信一&フォニックス・レフレクシオン／会場・セシオン杉並

六月一四・一五日 第九回セミナー「食料・身体性・環境セミナー」

講師・安田節子、青木やよひ、北沢万邦

十一月二日 第一〇回セミナー「二一世紀の市民的公共性」

講師・篠原一、青木やよひ、北沢万邦

二〇〇九年

一月二四・二五日 第一一回セミナー「人間にとつて労働とはなにか——ウィリアム・モリスから宮沢賢治へ」

講師・大内秀明、北沢万邦

四月二五日 第一二回セミナー「レクチャー・コンサート(世界音楽入門Ⅱ)」

「新実徳英の世界・螺旋をめぐる——生命の原理」

講師・北沢万邦、杉浦康平、新実徳英／演奏・長尾洋史、永井由比、寺岡有希子、上森祥平、上野信一&フォニックス・レフレクシオン／会場・セシオン杉並

六月二八日 第一三回セミナー／公開シンポジウム(食料・

身体性・環境セミナーⅡ)

「食の現状・農の未来」

パネリスト・植田啓子、片桐義春、安田節子／司会・北沢万邦／会場・北沢タウンホール

一〇月二四・二五日 第一四回セミナー「生殖革命と人間の未来Ⅰ」

講師・江原由美子、中嶋公子、長沖暁子、青木やよひ／司会・石田久仁子

今後の活動予定

二〇一一年一〇月一日

一般財団法人「知と文明のフォーラム」設立記念会

第一部 シンポジウム「知と文明の転換のために」

パネリスト・坂本義和、大内秀明、岡部憲明、西村朗／司会と補遺・北沢万邦

第二部 レクチャー・コンサート

トーク・新実徳英、パーク・ヨンヒ、北沢万邦／ピアノ・パーク・ヨンヒ

第三部 設立記念パーティー

二〇一二年秋 レクチャー・コンサート(世界音楽入門Ⅲ)

「アジアの世界音楽(仮)」

講師・北沢万邦、グエン・チエン・ダオ、松下功(予定)／演奏・奈良ゆみ(ソプラノ)、上野信一&フォニックス・レフレクシオン(予定)

事務局より

わたしたちが生まれ育った山河は、いま、天災と人災によって、かつてないほど大きな痛みを覚えています。とりわけ人災による痛みは深刻です。同じ災害を繰り返さないためのシステムの構築と、それを実行に移す強い意思が求められています。それには、大きなうねりが必要です。そのうねりを作るためにも、わたしたち一人一人が、それぞれの持ち場に応じた、小さいけれども持続するエネルギーを提供する必要があるのではないのでしょうか。わたしたちのフォーラムが、個々のエネルギーをつなぎ合わせる結節点となることを願わずにはられません。

なお当フォーラムではブログを開設しています。「北沢万邦の伊豆高原日記」、「楽しい映画と美しいオペラ」、「法曹界なう」、「おいしい本が読みたい」のほか、フォーラム関連の文化活動の案内、報告を順次掲載していますので、どうぞご利用ください。

http://blog.goo.ne.jp/maya18_2006/

ヴィラ・マリーヤ便り No. 4

発行日 2011年9月25日

発行所 一般財団法人 知と文明のフォーラム

〒413-0232 伊東市八幡野1105番地の57

代表 北沢万邦

編集部 TEL 042-488-3048 FAX 042-441-4565

design/ryoku yonekawa